

第8章では、メディアの中でもとくにテレビの役割に着目し、画面上に現れる政治言説と宗派制度の強化に関して論じられている。政治家や宗派エリートによる宗派制度を強化するような言説に加えて、視聴覚メディアの規制法それ自体が宗派主義を補強する一端となっていることが示されている。

第9章では、ヒズブッラーの国内外での姿勢と外部介入に際しての地政学的計算、および両者の相互連関性に関して論が展開されている。内戦中に支持を得たヒズブッラーは、政党としてレバノン政治に参画し、自らを宗派制度の中に押し込めることになった。その結果、サウディアラビア・イラン間の国際的な宗派間競争と国内での宗派間競争というツーレベルゲームへの参加へと舵を切らざるを得なくなった。

第10章の結論では各章を概括し、結語では、紛争で疲弊したアラブの国家を宗派や民族を基礎に再建することの困難性が、レバノンおよびイラクの事例から提示され、外見上の安定性は保てるものの、それがもろ刃の剣であることが指摘されている。

本書が現代中東政治研究に大きな貢献をする点は、宗派制度を手掛かりに狭義の政治制度のみならず、それを下支え、維持、再生産する過程を社会・経済・文化の面から包括的に記述している点である。権威主義体制の選挙分析やパトロン・クライアント関係の分析、イスラーム主義組織の思想研究に加えて、この点が新たな研究分野を拓く可能性を示している。これまでのレバノン政治における宗派制度の研究は、パトロン・クライアント関係や宗派制度の歴史的起源をめぐめるものが多数を占めているのに対して、本書は新奇性が高く、研究上の空白となっているいくつもの分野を取り扱っている。中東における政治の停滞や紛争の発生を「宗派的なもの」と単純化する傾向を避けるためにも、本書のアプローチをより一層の理論化することは有意義であろう。

東アラブ地域の民族・宗教をめぐる政治を研究している評者は、現在レバノンにおけるパレスチナ難民という事例を考究している。彼らは宗派制度の枠組みからも国民国家の枠組みからも排除されており、本書が示している宗派制度の理解を援用してその生存基盤のあり方を考察することは、非常に有意な課題となると感じられた。

(岡部 友樹 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Sugawara Jun and Rahile Dawut (eds.). 2016. *Mazar: Studies on Islamic Sacred Sites in Central Eurasia*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies Press. xii+344 pp.

はじめに

「中央アジア」というと現代の日本ではいわゆる中央アジア五カ国(ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン)を指すものと理解される事が多い。これはソ連時代、つまり近代以降になされた地域区分に基づく認識である。しかし歴史的に見るとこれらの国々は現在の新疆ウイグル自治区と地理的・文化的な連関の中にあり、文化的にも共有するところが多く存在する。このような連続性に注目して議論をする場合、「中央アジア」には新疆ウイグル自治区も含まれるとして「中央アジア」を広い意味で用いる立場をとる他に、より柔軟な地域概念である「内陸アジア(Inner Asia)」や「中央ユーラシア(Central Eurasia)」という語が用いられることがある。本書では後者の立場がとられており、新疆ウイグル自治区とフェルガナ盆地の両地域に共通するマザール参詣を中央ユーラシアにおける文化的特徴として捉え、議論を進めている。

本書は2007年にトヨタ財団によって採択されたプロジェクトである「新疆・フェルガナ両地域におけるマザール文書の調査・集成・研究——成果普及へ向けた国際会議開催と論集出版」の成果として出版された。このプロジェクトは、先行して2005年より2年間にわたり進められてきた、マザール文書の調査研究、保全活動プロジェクトの成果を踏まえたものであり、まず2008年に国際ワークショップ《Studies on Mazar Cultures of the Silkroad: an International Workshop》(国際学術研討会「絲綢之路上的麻扎文化研究」)が行われた。このワークショップには新疆の研究者、ウズベキスタンの研究者、日本の研究者が出席し、それぞれ集めた文書も利用しながらマザールに関する研究成果を披露した。本書に掲載されている全20本の論文はこの学

術検討会の成果をまとめたものである。

本書の構成と内容

本書は五部構成となっており、具体的な章構成は以下のようになっている。

Introduction

Chapter One: Contemporary Mazars

1. Rahile DAWUT “Mazar Pilgrimage among the Uyghurs”
2. ZHOU Xijuan “Transition and Transformation: Healing Rituals and Mazar Worship”
3. Gulbahar GHOJESH “Kirghiz Bakhshi and the Mazar”
4. WANG Ping ““Ziyara” and the Hui Sufi Orders of the Silk Road”
5. WANG Jianxin “The Saint Mausoleums of Sufi Order Lingmingtang”
6. Aitzhan NURMANOVA “Pilgrimages to Mazars in Contemporary Kazakhstan: The Processes of Revivalism and Innovation”

Chapter Two: Iranian Elements

7. Ablimit YASIN “A Cultural Layer in Relation to Hazrat-i Ali: A Preliminary Approach to Mazars of “Imams” in Khotan”
8. Nodirjon ABUDULAHATOV “Sacred Sites Associated with Hazrat ‘Ali in Central Asia”

Chapter Three: Document Studies

9. ZHANG Shicai “The Waqf System and the Xinjiang Uyghur Society from the Qing Dynasty to the Republic of China Period”
10. Ashirbek MUMINOV “A Holy Place and Its Shaykh in the XIX Century History of Southern Kazakhstan”
11. SUGAWARA Jun “Opal, a Sacred Site on the Karakoram Highway: A Historical Approach Based on Mazar Documents”

Chapter Four: Stories of Chiltān

12. SHINMEN Yasushi “The Historical Significance of Chiltān Mazar in Yarkand City”
13. Abliz ORXUN “A Few Remarks on Muḥammad Šiddīq Zālī and His Tadhkira-i Chihiltan”
14. Patrick HÄLLZON “Mazar Pilgrimage: In The Footsteps of Swedish Missionaries in East Turkestan”

Chapter Five: Voices of Tadhkira

15. Devin DeWEESE “The Tale of Jānbāz Khoja: Pilgrimage and Holy War in a 19th Century Tadhkira”
16. Alexandre PAPAS “A Sufi Travelogue as a Source for the History of Mazars in the Tarim Basin”
17. Rian THUM “Untangling the Bughrā-Khān Manuscripts”
18. SAWADA Minoru “The Gelealogy of Makhdūm-i A‘ẓam and the Cultural Traditions of Mazārs”
19. Omerjan NURI “The Mazar of Imām Mūsā Kāzīm of Khotan: A Quest for Legends and other Cultural Elements”
20. SUGAHARA Mutsumi “Remarks on the Tazkira-i Awliya in the Uyghur Script”

第1章では現代におけるマザール参詣についての研究が、主にフィールドワークの成果に基づきまとめられている。Dawut の論文では、現在に見られるマザール参詣が実は前イスラーム的伝統に由来するものであり、本質的にはイスラーム的ではないということが強調されている。Zhou の論文では、マザールで行われる治療をシャーマニズムの観点から捉えることで、人々にとってマザールが精神的な力 (spirirual power) の源と見做されているということが述べられる。Ghojesh の論文ではマザールで行われるシャーマニズムが、

民族的伝統に立脚したものであると同時にイスラーム的な要素も重要であり、無視することは出来ないということ指摘されている。Wang Ping の論文では、新疆にあるマザールの中でも特にスーフイズムの色彩が強いものをとりあげ、タリーカとしてのマザールという側面が述べられている。このようにマザールにも幾つかの類型が存在し、Dawut や Zhou が挙げたような、イスラーム色の薄めのものから、他地域でも見られる伝統的なタリーカのようなもので存在するということが述べられている。また Wang Jianxian の論文ではタリーカとしてのマザールの中でも新疆周辺に特徴的なものが挙げられ、トルコなどとはまた異なったタリーカの様子が描写されている。Nurmanova の論文では現代のカザフスタンで信者を増やし続けている“*Ata Zholi*”というイスラームの新しい派閥と、彼らに関連するマザールとについて論じられている。彼らは「ムハンマドがアッラーの預言者ならば、“*Ata Zholi*”の創始者である Qidīrali Taribayev は(祖先の) Arwah の預言者である」と述べ、アッラーと Arwah 双方の満足の道があると主張している。これらの例からも分かるように、マザール参詣は現代においても中央ユーラシアの人々にとって重要な儀礼であり、それは過去の遺物ではない。

第2章では主にアリーと関連づけられているマザールについてまとめられている。Yasin の論文では新疆において浸透している12イマーム信仰などが、シーア派のそれとも異なっている独自のものである事が指摘されている。Abdulhatov の論文では良き信徒、そして戦士としてのアリーに対する新疆ウイグル自治区の人たちの敬愛がどのようなものであるのか、地域に伝わるアリーにまつわる伝説などを引用しながら紹介している。本章の論文で述べられているように、歴史的に見てもこの地域においてペルシャの影響が強いことは明らかである。しかし評者には、アリーの崇敬ということに関しては、話がやや複雑になるために注意が必要であるように思われる。Wang Ping の論文にも出てくるカーディリー教団などのタリーカにおいては、スィルスィラ(タリーカの系譜)にアリーが含まれているために、アリーには精神的な導師としての役割もある。そのためこれらのタリーカに属するマザールに通う人々が、シーア派とは関係なく、精神的な修行の一環としてアリーに縁があるとされているマザールにも通い、礼拝を捧げるということも十分に考えられるからである。

第3章では残されている史料に基づく研究がまとめられている。Zhang の論文では、新疆におけるマザールと清朝との関係について、主としてワクフと徴税という観点からまとめられている。Muminov の論文では、実際の聖者の子孫に聞き取りを行い、彼らの持っていた文書を分析している。Sugawara (菅原純) の論文では、Opal という町についてのワクフ文書集(Compilation of Kashghar Waqf Documents)を分析することで、Opal が Kāshghar と密接な関係にあったということが示されている。

第4章では Chiltān に関する研究がまとめられている。伝説によれば、Chiltān とは普段は第四天に住んでいるとされる40人の英雄、聖者もしくは天使のことである。彼らのうち7人は人々を救うべく地上に下され、地上で暮らし、やがて亡くなったとされる。その後彼らの埋められた墓所のことは Haft Muḥammadān と呼ばれるようになった。Shinmen (新免康) の論文では、これらが歴史学の方面から丁寧に考察されている。そして、Yarkand の Chiltān マザールは16世紀から現在まで新疆で権威を持つマザールであり続けたと考えられるということが示され、イスラームの聖者と都市との関係性に注目した研究をすることが、マザールの特徴を分析する上でも有益であるということが指摘されている。Orxun の論文では Haft Muḥammadān に関する2つのタズキラ(後述)をとりあげ、これらの比較を行っている。Hällzon の論文では19世紀から20世紀にかけて新疆に滞在したスウェーデン宣教師による記述についての研究がなされている。宣教師による新疆の人々の信仰生活に関する記述は詳細でありマザールなどに対する貴重な外部からの視点による分析であるが、彼の記述には西洋中心主義的な思想に基づくと考えられるような面も多々存在し、彼の宗教的な背景からいゆる民衆イスラームであるマザールには批判的である。そのために彼らの記述内容は大変に興味深いものではあるが、それを受け取るにあたっては十分に批判的な精査を行っていかねばいけないということが指摘されている。

第5章ではタズキラをベースとした研究がまとめられている。タズキラとは元々アラビア語では忘れぬように記すもの、思い出させてくれるもの、というような意味⁴⁾で、そこから広く聖者伝や法定文書な

4) タズキラ(tadhkira)は思い出す、覚えているという意味の dhakara が元になっている名詞であり“A thing by means of which something that one wants [or desires to remember] is called to mind; memorandum.” “A biographical memoir”[Lane

ど「忘れるべきでないと思われるもの」をまとめた事典的な文書というような意味でも用いられているようである。多くのタズキラでは聖人はイスラーム世界の中心マッカ、マディーナからやって来て、イスラームを広めるために奮闘するという内容であり、それが口頭で語られ、そして記録されてきた。しかし DeWeese の論文では、通常のタズキラとは異なった内容をもつ Jānbāz Khoja という珍しい聖者の伝記の内容が明らかにされている。これはその内容から見て初期のタズキラであり、それゆえ詳細な分析により、これまでのタズキラとは異なる多くのデータを得ることが期待される。Papās の論文では Muḥammad Ṣiddīq Zālīlī という学者の書いた Safarnāma という旅行記的詩集が扱われている。このタズキラには当時の地形の詳細な記述の他に、マザールについての詳細な記述があり、多くの情報を得ることが出来る。Thum の論文では、これまでカラ・ハン朝のなかで有名無実な肩書と考えられていた Bughrā-Khān について、様々な写本の内容を分析することで考察を加えている。Sawada (澤田稔) の論文はナクシュバンディー教団に属する Makhdūm-i A'zam について、彼や彼の子孫にとってその血統が精神的な正当性を保障する上で重要であると見做されていることを説明した上で、彼らの血統がどのようなものであるのかを、タズキラの比較研究によって明らかにしている。それによれば、彼の血統には二種類のものがあるということが確認され、また彼の血統の鍵となる先祖の Burhān al-Dīn Qīlīch にまつわる伝説も二種類存在するということが指摘される。Nuri の論文では、タズキラの信憑性には非常に疑わしいものがあるが、マザール文化を分析するうえでは重要であるという主張がなされている。そしてタズキラを分析した結果の実例として、地元の人々もよく意味のわからなかった sūmā という単語がユグル族の seme (寺院) という単語から来ていることを突き止めたと述べられている。そして Sugahara (菅原睦) の論文では、15 世紀に起こった古いウイグル語文字の復興運動について、特に Tadhkirat al-awliyā という、ペルシャ語のタズキラからの翻訳をした写本について (1) 正書法、(2) ペルシャ語原文との関係、(3) テクストの言葉に対する幾つかの所見という観点から議論が行われた。その結果、これらウイグル語写本は同じ単語についても写本間で綴りが異なるなど、言葉自体の形にはそれほど関心が払われていなかったということが明らかになったが、中央アジアにおけるテュルク諸語の発展について、アラビア文字で書かれたものからは得られなかったような多くの情報が得られたと述べられている。

マザールという研究フィールド

本書で様々な研究者によりなされたこれらの研究は、それぞれに問題意識や方法論を共有しているわけではないが、マザールやそこに関わりのあるタズキラに関係があるという点で、ゆるく繋がったものであると言える。文化人類学、歴史学、言語学など、それらの依って立つ分野はあまりに多様である。それ故に、一見マザールという一点を除いてそれぞれ向いている方向が全く異なる研究の、寄せ集めのようにも見えるかもしれない。しかしそれは、中央ユーラシアにおけるマザール参詣という文化的な共通性の上での研究として、むしろその多様性や可能性の広さを指し示したものであると言えるのではないかと出来るのではないかと。マザールそれ自体は、墓所や、聖人に曰くのある木、泉などのある場所に過ぎない。確かにそれ自体だけでも研究になる。しかしそれらが現地の人々に大切にされ、多くの人が集まり、それらについて人々の間で語られ続ける限り、そこには多くの研究が行われうる可能性が生じ、同時に多くの研究が会合場所ともなり得るのではないかと。「マザール」という一つのテーマのもとに様々な研究が行いうるという事を示してみせた本書は、マザール研究に既存の国家や民族の枠組みを超えた新しい研究フィールドを創りだす力があるという可能性を示唆しているものであると言えるだろう。

<参考文献>

- 新免康・真田安・王健新 2002『新疆ウイグルのバザールとマザール』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
シルクロード学研究所(編) 2007『中央アジアのイスラーム聖地——フェルガナ盆地とカシュガル地

1984: 969-970] という意味を持つ。クルアーンの中でも何度も登場する単語であり、その場合は主へ従うという義務を思い出させてくれるものという意味で《主を畏れる者への訓戒に他ならない》(Q 20:3) というような使い方をされる。

方』明新社。

日本ムスリム協会 1982『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会。

Lane, Edward William and Stanley Lane-Poole. 1984. *Arabic-English Lexicon*. Cambridge: Islamic Texts Society.

Shinmen Yasushi, Sawada Minoru, Edmund Waite (eds.). 2013. *Muslim Saints and Mausoleums in Central Asia and Xinjiang*. Paris: J. Maisonneuve.

(庄司 翼 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Zachary Valentine Wright. 2015. *Living Knowledge in West African Islam: The Sufi Community of Ibrāhīm Niasse*. Leiden: Brill. xviii+333pp.

15世紀頃にカーディリー教団がサハラ西部に到達し、19世紀初頭にはティジャーニー教団もこの地に勢力範囲を拡大させるとともに、西アフリカにおいてスーフィズムが定着し始めた。18-19世紀間に生じた一連のジハード運動の展開のなかでは、イスラーム国家建設が目指された。他地域がヨーロッパ植民地勢力との邂逅のなかで近代化政策を推し進めたのとは異なり、西アフリカでは19世紀末以降、スーフィー教団に属するイスラーム知識人が担い手となり、急速な「イスラーム化」が推し進められた。そして本書の対象とするイブラーヒーム・ニヤース (Ibrāhīm Niyās, 1900-1975年) は、間違いなくそうした人物のうちのひとりである。

近年、イブラーヒーム・ニヤースを対象とする本格的な研究書並びに学術論文が提出されている。その中でも、注目に値するのが、[Hill 2007] のセネガルの知的コミュニティを民族誌学的に叙述した論考と [Seeseman 2011] の丹念な文献資料の分析によって西アフリカにおけるスーフィーの思想的営為を明らかにした論考である。本書は両論考の延長線上に位置付けられる。本書は、イブラーヒーム・ニヤースを議論の軸として設定し、西アフリカにおけるイスラームの学問伝統である直接的な師弟関係を通して為されるイスラーム諸学の教授法が当該地域のムスリム・アイデンティティの形成に影響を及ぼしたことを明らかにしたものである。なお本書で度々言及されるコミュニティという用語は、主としてイブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団のことを指す。

著者 Zachary Valentine Wright は、カタルのノースウェスタン大学准教授を務めており、アフリカ史や現代中東史などの講義を受け持っている。また著者はイブラーヒーム・ニヤースの主著『封印アブー・アル＝アッパースの溢出から覆うことを取り除くもの』(Kāshif al-ilbās ‘an fayḍa al-khatm Abī al-‘Abbās) の英訳を手掛けており、今後の活躍が期待される新進気鋭の研究者のひとりである。以下、各章の概観に触れた後に、その議論の展開について述べることにする。

序章と第1章「西アフリカの歴史におけるイスラーム知識人コミュニティ」では、本書の議論の前提となる枠組みが提示される。まず西アフリカの学問伝統のなかで重要視されてきたイスラーム諸学のうちマールク学派法学、クルアーン学、秘教学 (‘ilm al-asrār)、スーフィズムについて論じた後に、当該地域における師から弟子へと直接的に受け継がれる知の伝統的特徴について考察が為されている。

第2章「新たなセネガンビアのイスラーム知識人コミュニティ」では、イブラーヒーム・ニヤースが出現するまでのニヤース家の歴史的背景とイブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団の特徴について論じられている。彼の父親であるアブドアッラーフ・ニヤース (‘Abd Allāh Niyās, 1922年歿) の時代は、マールク・スイ (Mālik Sy, 1922年歿) やアフマド・バンバ (Aḥmad Bamba, 1927年歿) といった優れたイスラーム知識人達が活躍した時代でもあった。彼らは積極的にイスラーム諸学の会得に努め、スーフィズムを通してイスラーム諸学に新たな意味合いを与えた。イブラーヒーム・ニヤースは、前の世代の知的遺産を受け継ぐことで、自身の教団の基礎の確立に役立てた。1929年に、突如イブラーヒーム・ニヤースは自身が神の恩寵 (ファイダ) の持主 (ṣāhib al-fayda) であると宣言し、全ムスリムに神の恩寵を与えることで、当該地域のムスリム・アイデンティティの強化に努めた。

第3章「尊崇される信徒達——サルムのスイセ家」では、イブラーヒーム・ニヤースから直接的に知的遺産を受け継いだアリー・スイセ (‘Alī Cissé, 1982年歿) が属するスイセ家の歴史的背景について論じられ